

- 2:1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。
- 2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」
- 2:3 これを聞いてヘロデ王は動搖した。エルサレム中の人々も王と同じであった。
- 2:4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと聞いていただいた。
- 2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。
- 2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』』
- 2:7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。
- 2:8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。
- 2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまつた。
- 2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。
- 2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。
- 2:12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

<説教>

永遠の神のひとり子、私たちの罪からの救い主、王であるイエス・キリストは〈ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれにな〉りました(1)。イエスは神であるまま、人となってこの地上にお生まれになりました。私たちすべての人と全く同じく、特定の時代に、特定の場所で、特定の民族の一人、特定の夫婦の子としてお生まれになりました。ただし、夫婦の性的交わりにはよらずに聖霊によって母マリアの胎に宿されました。そのときイエスが人間の罪だけは受けなかったのも聖霊によることでした。聖霊は既に旧約の預言者たちに働き、キリストの生まれやその場所を予め旧約聖書に記させていました。

さて時の王〈ヘロデ王〉は、当時ユダヤの地を支配していたローマ帝国皇帝(カエサル)から「ユダヤ王」の称号を与えられ、B.C.37 ~ 同4年にユダヤの地を治めました。彼は皇帝などローマ帝国の権力者たちに巧みに取り入り、その地位を固めました。ユダヤ人たちの機嫌も取るためにエルサレム神殿を建てるなどもしました。しかしそれは真の神を信じ、神と人を愛していたからではなく、自分の地位権力を守るためでした。そのためヘロデは何でもしました。自分の地位権力を脅かす者だと見なした人物は親族だろうと誰だろうと抹殺しました。しかしそんなヘロデも死んで王位から引きずり下ろされます

(19)。イエスがお生まれになったのは、その1、2年ほど前だと考えられています。

そんな〈ヘロデ王の時代〉に、〈見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来〉ました(1)。彼らは言いました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」(2)。彼らは、今の人文学者兼自然学者のような、非常に広い分野に通じた知識、知恵の持ち主だったようです。〈東の方〉とは今のイラクやイラン辺りでしょうか。そこはヘロデ王の時代から600～700年ほど前にユダヤ人たちが捕囚として連れて行かれた地域(バビロニア、ペルシャ)とも重なっています。それで〈博士たち〉は確かに異教徒でしたが旧約聖書の知識がそれなりにあり、やがて〈ユダヤ人の王としてお生まれにな〉る人のことも知っていました。その彼らが〈その方の星が昇るのを見〉ました。確かにこれまで見たことがない特別な〈星〉でした。〈その方〉は「自分の星」を天に出現させる力のあるお方、つまり天地万物の〈王〉(それはすなわち聖書の「神」)に等しいお方に違いないと博士たちは確信したのでしょう。彼らはユダヤに〈ユダヤ人の王〉が生まれたと確信しました。しかも彼らはその〈王〉はやがて自分の国〈東の方〉をも治めることになる「自分たちの王」でもあると確信しました。だから何を差し置いても、学問や仕事を中断しても、自分の国を出てでも、そのお方にお会いして〈礼拝する〉べきだと考えたのです。

そんな博士たちが長旅の末、やっとユダヤの中心地エルサレムに到着して言いました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました」。彼らは「やっとこれで捜し求めていたユダヤ人の王にお会いすることができる」との思いで喜び勇んでいたことでしょう。その言葉はヘロデ王の宮殿に「直行」してヘロデに言ったとも考えられるし、エルサレムの町中で人々に聞いて廻って言ったとも考えられます。とにかく博士たちは、ヘロデ王を始めとしたエルサレム中の人々が皆、新しく生まれた自分たちの王のことを知っているに違いないと考えたのでしょう。しかし違いました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と聞いても誰も知りません。「私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」と説明しても「遠くの東の国の異邦人がユダヤ人の王と何の関係があるのかね」という冷たい反応だったのではないでしょうか。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(ルカ2:11)との福音はエルサレムに伝わっていなかったのでしょうか。また、エルサレムの神殿で敬虔なシメオンや女預言者アンナによって示され語られた幼子イエスのことを見聞きしたエルサレムの人々(同22-38)はその後どうしたのでしょうか。分かりません。ただ分かることは、このときエルサレム中の人々はその幼子イエスを自分たち(ユダヤ人の王としてお生まれになった方)、キリストであると認めよう、良く知ろう、求めよう、知って信じよう、礼拝しようとしなかったということです。

そして、ヘロデ王もその幼子のことを知りませんでした。それで博士たちの言葉を聞いて〈動搖し〉ました(3)。それまで30年以上ユダヤの王として君臨している自分の地位権力を脅かす者がいたと思い、「おびえ、取り乱し」ました。一方、エルサレム中の人々は、自分に変わるユダヤ人の王が生まれたことを知ったヘロデが逆上して何をするのかという恐怖、またその巻き添えを食らう恐怖で〈動搖〉しました。人々は「この時代に生まれたユダヤ人の王」は迷惑だと思いました。「今は自分たちの王はヘロデのままでいい」とい

うことです。つまりは、「神に従うより、人間に、悪魔に、罪に従っている方が楽で性（しよう）に合う」ということです。それが罪人の「本性」「本音」でもあります。

さてヘロデはこの〈ユダヤ人の王〉を殺すために知恵を絞りました。「ユダヤ王」の権力を行使して、〈民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問い合わせた〉ました(4)。彼らはミカ書の中からベツレヘムだと答えました(5-6)。

〈そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出し〉ました(7-8)。しかし、

〈私も行って拝む〉とは大嘘であり、「人を遣わして殺す」(16)つもりでした。それは確かに酷いことでした。でも、ヘロデに答えた〈民の祭司長たち、律法学者たち〉の態度もまた酷いものでした。彼らは待ち望んでいた自分たち〈ユダヤ人の王〉、〈キリスト〉が聖書に書かれているとおりにベツレヘムでお生まれになったことを知っても〈礼拝するために〉行こうとはしませんでした。やはりエルサレム中の人々と同じように、「ユダヤ人の新しい王」のゆえに自分の身に降りかかる災難を避けたかったのでしょうか。また、「キリストについての新しい情報を異邦人から聞かされた」みたいな悔しさ、ねたみ、プライドが傷ついたということでしょうか。分かりません。ただ分かることは、彼らも、ベツレヘムで生まれた幼子を自分たち〈ユダヤ人の王としてお生まれになった方〉、キリストとして良く知ろう、求めよう、認めよう、礼拝しようとしたということです。その心根は先に見たエルサレム中の人々の本音、本性と同じでした。

さて、かく言う私たちはどうでしょうか。クリスマスの主であるお方、私たちの王であるお方、イエス・キリストをもっと良く知ろう、知って信じよう、礼拝しようとしているでしょうか。〈礼拝するために〉何を差し置いても、学問や仕事を中断してでも、自分の国を出てでも、「どこにおられますか」と必死に求めているでしょうか。改めて自らを深く顧み、悔い改めて、そのようなクリスマスの日々を歩みたいと願います。